



次世代のがんプロフェッショナル養成プラン インテンシブコースセミナー活動報告書

日時: 令和5年12月19日(火) 18:00~19:30 ※Zoom開催
 講師: 伊藤 ゆり先生 (大阪医科薬科大学 医学研究支援センター 医療統計室 室長・准教授)
 受講者: 32名 (アンケート回答数 31 (回収率 96.9%))
 テーマ: がんサバイバーのリスクアセスメントとがん予防(第2回)
 主催: 兵庫県立大学看護学研究科 次世代のがんプロフェッショナル養成プラン 代表 川崎 優子

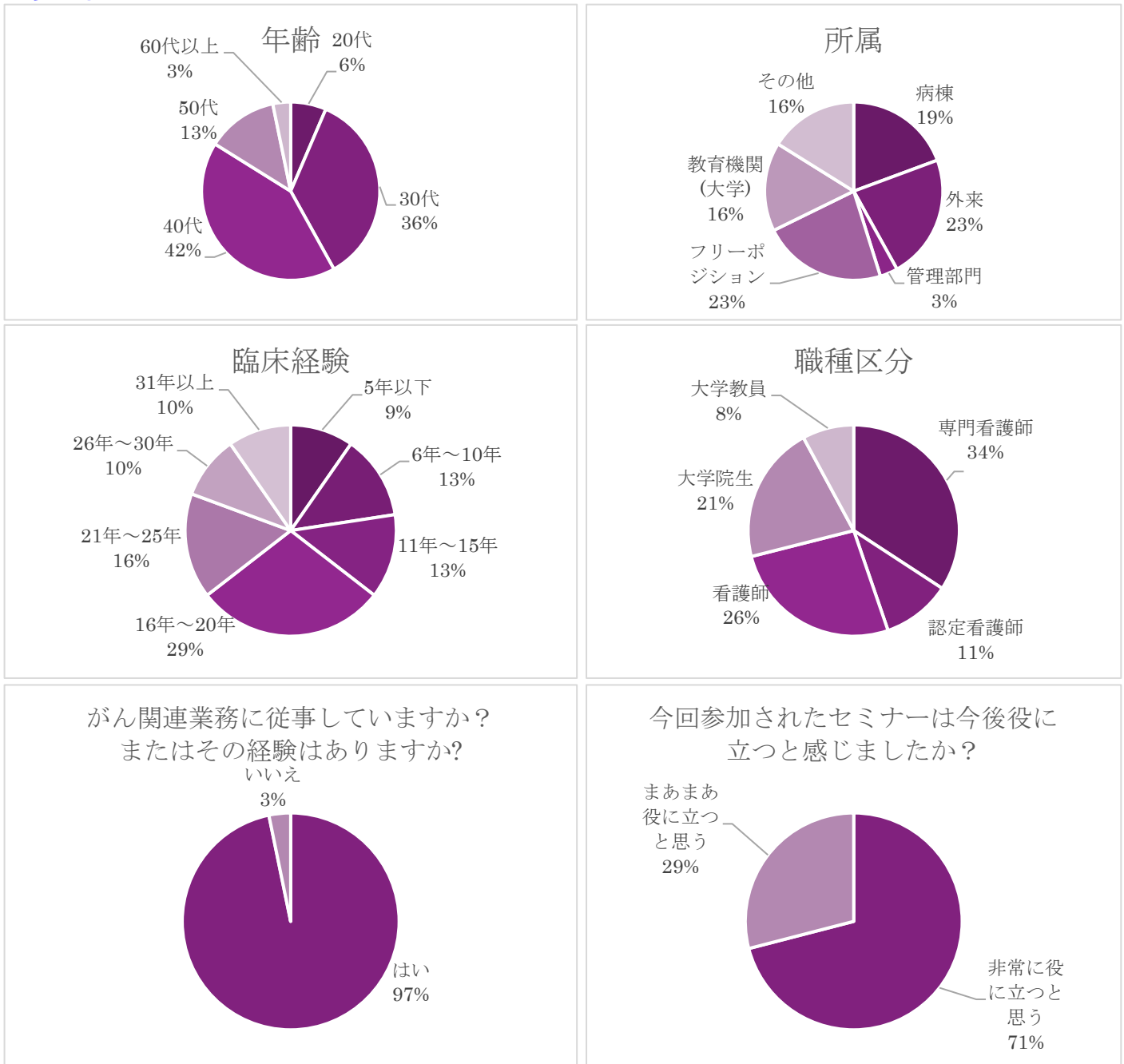


<概要>

第2回目に当たる今回は、大阪医科薬科大学 医学研究支援センター 医療統計室 室長・准教授の伊藤 ゆり先生に、前回説明のあったPICO/PECOについて概要(対象の設定、アウトカム指標、比較可能性)を再度ご説明頂いた後に、事前に提出いただいた演習課題でのテーマごとに分けた6グループで、30分程度ディスカッションを行いました。その後、各グループから発表をしていただき、臨床で抱える課題などの情報共有を行い、がんサバイバーのリスクアセスメントの現状についての臨床現場における現状認識や課題の確認など参加者間での情報共有及び理解を深める時間となりました。

<アンケート結果>

●参加者について



●今回のセミナーあなたが感じたこと、印象に残ったことがあれば自由にお書きください。

▼研究

- ・ すごく面白かった。今まで受けた研究に関する授業、講義の中で 1 番興味深く、実践的で、研究すること、研究に対して親しみを感じられた。
勝手に苦手意識を持っていた統計や量的な研究についても、面白そうだな、いつかやってみたいなと思えた。質と量の研究の関係性を復習できた。修士の時は理解が追いつかず、研究は大変なもの、膨大な知識を要し、骨が折れるものにとらえていた。でも、今は研究の必要性もわかるし、研究の、新しい何かを発見する楽しさも少しわかるようになった。そういう中で、今回のセミナーは私にとって特別な意味を持ちそうだ。
- ・ 臨床の現場にいると研究について考える時間がなかなかなかったり、研究の思考で現場の事象を捉えることに苦手意識があり、大学院を卒業してからも難しい印象をずっと持っていました。しかし、今回のセミナーに参加し、講義を聞いたりディスカッションをする中で、少し研究に関する思考を取り戻せたような感覚になりました。また、まずは PICO/PECO の視点で現場での事象を捉えることで、現場での問題を紐解ための手がかりにもなるのではないかと思います。これまで量的な研究に取り組んだことがなく、取り掛かることも難しいと思っていましたが、先生の講義を聞くことでポイントを掴めて非常に勉強になりました。
- ・ CNS にとって、研究は必須ですが、日々の変化はとても流動的で、研究は客観視するいい機会ではありますが、時間の確保が難しい中で、みなさん取り組まれているんだと感じました。修士論文で基礎的なところは習いましたが、全然知識が足りないのので、このようなセミナーがあると嬉しいです。
- ・ 研究に対して難しいという印象が強く、なかなか取り組めなかったのですが、自分が何を知りたいのかを考えることで、難しいではなく楽しい気持ちで研究に取り組めるような気がしました。
- ・ 量的な研究の視点については、弱いと感じていた。データをどのように分析するか、研究するときの必要な要素について改めて考える機会になった。
- ・ 現場にいるからこそ多くの課題を感じられるゆえに研究につながれるといいのですが、やっぱり難しいと感じた
- ・ 関心テーマの近い方々と意見交換ができ、研究へのモチベーションが高まりました。
- ・ 普段の実践の中で、研究的な視点をもつことを意識すること

▼PICO、PECO

- ・ 質的研究を考えていたので、PICO/PECO にあてはめて考えるのが難しかった。
しかし、グループに分かれたディスカッションではがん看護に従事している方達がどのような疑問を持って、研究に落とし込もうとしているのかを知ることができていい勉強になった。
- ・ 研究についてこれまで詳しく学習したことがなかったため、新しいことを学ぶ機会になりました。特に PECO/PICO については、演習を通してより深く知ることができ非常に大きな学びになりました。
- ・ PICO、PECO に落とし込むことで、客観的な思考ができ、研究の目的も絞り込みやすかったです。尺度や統計的な視点は、今後の課題だと思います。
- ・ PICO /PECO を用いて研究を掘り下げること

▼ディスカッション

- ・ ディスカッションの際、他の方がみな CNS ではあったのですが、量的研究の経験がないとのことで、PICO、特にアウトカムがなかなか決めきれないという情報を共有できました。大学院で一通り研究の概論は学びつつも、実際に研究を行わなければ CNS でも難しい、これが一病院看護師であればなおさらだということのを再認識できました。院内で看護研究を進めるうえで、研究結果を臨床へ還元できることが大切ですが、そもそもの「研究」のスタートがとてもハードルが高く、サポート体制の構築の必要性を考えることができました。
- ・ 自分とは違う環境で活動されている方の研究計画や課題などを聞くことができ、貴重な経験だった。今後、自分の活動の参考にしたり、様々な視点を持って病棟での実践に生かしていきたいと考えた。
- ・ 同じような課題を持っている仲間がちゃんといえることに安堵した。そこで、ディスカッションできたことが、日々自問自答しかできないと思っていた自分にとって、刺激が受けられる機会だった。
- ・ 同じような研究の視点をもつ人と話せたのはとてもよかった。研究活動はなかなか腰が重いのが、よい刺激をもらいやってみようかなという気持ちになった。
- ・ 修士を修了して以来研究に関するディスカッションをする機会がなくとても有意義で楽しい機会でした。またの開催を希望いたします。

▼アウトカム

- ・ 研究でも誰を対象に、どのような介入や比較を行えば、よりよいアウトカムに寄与できるのかという視点を改めてしっかり意識することにつながった。サンプルサイズやバイアス、交絡因子などあらゆる視点から適切な対象者を選択することや十分な人数を集めること、信頼性や妥当性が担保された追うとカムの指標をどうするのか等について自分の研究に立ち返り、考えるべき視点を学べた。
- ・ 研究を行う際、アウトカムをどこに設定するのかを明確にする重要性が理解できた。また、交絡因子は考えていなかったため、今後研究に取り組む際には検討していきたい。
- ・ アウトカムは私だけでなく皆さんが悩んでいるところなのだとわかり、今後の励みになりました。

▼その他

- ・ 行政保健師として癌の方に直接関わる機会が少なかったので参加するのに不安があったのですが、今回の講義や皆さんとお話を通して、考えが深まりとても良い機会となりました。
- ・ 質的研究のみの経験者でしたので、初回の講義は難解だと感じ、参加者の方々と同レベルにいないことを不安に感じてグループワークでは自身の課題と考えを述べられずに申し訳なく、勉強不足を痛感しました。
- ・ 看護や業務改善の効果をどういう視点で測るかということについて、グループ内や他グループの発表を通して色々な示唆を得ることができました。
- ・ いろいろな立場の人がおられてので、いろんな意見を聞くことができた
- ・ いろいろな課題に取り組んでいることを学んだ
- ・ サンプリングや対象選定の難しさについて

●今回のセミナーで、今後看護(研究)に活かせるようなポイントがありましたら、自由にお書きください。

▼研究

- ・ 先生の研究って楽しいなという言葉が印象的でした。看護研究をするうえで、自分の知的好奇心が一番重要だと思いました。他者とディスカッションをしながらPICOを考えていきたいと思います。
- ・ 皆さんのご発表をお聞きし、具体的に研究デザインを決めていくことの大切さと難しさを感じました。講義の内容も復習して、研究の立案に取り組みたいと思います。
- ・ 日々の看護の中でのもやり感が明確になり、自部署においても、そのような視点で現場をふりかえるという、研究的な視点を学べたと思います。
- ・ 癌の治療の実態などが伺え、癌を抱えた自分の街の住民さんたちについて研究してみたいと思いました
- ・ バイアスや交絡について改めて考える機会となり、新たな気づきがありました。
- ・ 量的研究に対する考え方が今後活かせると思う。
- ・ 講義内容が分かりやすく、研究の内容が深まった。
- ・ 対象の置き方や、交絡因子の検討方法
- ・ 評価の指標が重要であることを分かった

▼PICO、PECO

- ・ 漠然とした研究課題を、PICOに当てはめて考えることで具体的な計画にできそうだと思います。私の研究したいテーマは、まだかなり漠然としていますが、今後、この考え方を活用していこうと思います。
- ・ PICO/PECOで看護研究を当てはめるとどこが不明瞭で明確なのかが見えてくるので、研究の可視化や全体を把握するのに活かせると思う。
- ・ PICO/PECOの重要性を再認識できたので、活かしていきたい。
- ・ PICO/PECOの視点を持って現場での事象を捉えていくこと
- ・ pico/pecoの立て方
対象やアウトカム設定の考え方
- ・ PECOの概念の考え方について
- ・ Picopecoの考え方

▼アウトカム

- ・実施しているケアを評価するうえでも研究をした方がいいとは思った。
患者・家族評価ではなく、スタッフの意識調査でもいいのかもと思った。
現場が対象者のスクリーニングをかけて、患者さんやご家族に情報を提供することができるようになっていくことが、その後の介入や経過観察が継続でき、必要時に相談へつながっていれば、相談に上がってきた内容を質的研究の対象にもできるかと思った。
ただ調査するだけではなく、その先のアウトカムを看護上の問題改善に活かすには？という視点を忘れずに検討したい。
- ・最初に質的研究で因子を明らかにしたのちに量的研究に移行する、またはその逆のパターンで最終的なアウトカムに近づく方法を考えられました。
- ・アウトカムをどこにするか悩んでましたが、アウトカムだけでなく、誰を対象にするのかなども具体的に考えていくことが重要だなと感じました。
- ・outcome の設定には背景をどれだけ調査できているかで変わる。対象の選定や交絡因子の検討の必要性について。どこをエンドポイントにするのかの視点。
- ・アウトカム設定の大事さと段階的に研究を進めていくこと
- ・対象やアウトカムの設定の仕方

▼その他

- ・気になっていることはたくさんあるのですが、何年もくすぶったままになっていることについて、同じ課題感のある同僚とディスカッションからはじめていきたいと思います。

●その他、何かご意見、ご感想があればお聞かせください。

- ・伊藤先生の講義がとても面白く、研究的視点の刺激をいただいた。臨床の中で実施可能な研究について、もっとアドバイスをいただきたかったが、自分自身の研究課題がぼんやりとしていて、今回のセミナーを活用することができなかったことが悔やまれます。兵庫県立大学の先生方、貴重な機会を提供していただき、本当にありがとうございました。
- ・2回シリーズ、大変有意義な機会となりました。ありがとうございました。運営や講師の先生のご都合もあるかと思いますが、「前回の事を忘れました」「アンケートへどう返答したか忘れました」といった声がグループの中で聞かれたので、開催時期がもう少し近いと良かったのかもしれないと感じました。
- ・全2回にわたり、伊藤先生から研究のご講義をいただき、ありがとうございました。Webセミナーとして企画していただいたことで、参加が可能となりました。
- ・がん看護に携わる看護師を支援するために（CNSとしての視点から）どのように関わるかといったようなテーマも取り上げて頂きたいなと思いました。
- ・今回、参加させていただきとても勉強になりました。みなさまとお話しが出来たことで、より研究に対する気持ちが高まりました。ありがとうございました。
- ・今回のような研究のスキルをアップする研修会を希望します。ありがとうございました。
- ・研究、実践報告に関すること、高齢者のがん治療に関することも希望します。
- ・特にありません。企画とご案内をいつもありがとうございます。
- ・ありがとうございました。とても勉強になりました。
- ・大変貴重なご講義をありがとうございました。
- ・定期開催していただきたいです。

●今後がんプロセミナーに希望するテーマ

